

*** 記 事 ***

例会記録

三月例会 平成十四年三月二十三日

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、三宅鑛一——断種法史上の人びと(その五)

岡田 靖雄

一、また江戸幕府寄合医師添田玄春の日々の暮し

深瀬 泰且

四月例会 平成十四年四月二十七日

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、戦前日本の精神病統計と王子脳病院の患者記録の分析

鈴木 晃仁

一、山脇先生古医道随筆について

酒井 シヅ

五月例会 平成十四年五月二十五日

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、江戸医学館における臨床記録

町 泉寿郎・戸出 一郎

一、日本における義肢装着者の生活援護史研究

坪井 良子

例会抄録

江戸幕府寄合医師添田玄春の日々の暮し

深瀬 泰且

「添田玄春日記」

順天堂大学山崎文庫には「添田玄春日記」七冊が収蔵されている。嘉永元年（一八四八）から元治二年（一八六五）までの一六年にわたる添田家の日記であるが、現存するのはわずか八年にすぎない。これは添田家の執事の筆になる日記で、玄春自身による記述ではないので、玄春の社会的な言動や感想、心の動きはしるされていない。その反面玄春をはじめとして、雇人の細々として行動まで詳細に示るされているという別の一面もあって、添田家の客観的な状況を示るにはかえって有利であるという利点もある。この資料からみた玄春の暮しのうち、今回は私的生活を中心に報告した。

添田家の系譜

『寛政重修諸家譜』によると添田の先祖は藤原氏で、樽崎加賀守豊氏にはじまり、のちに毛利氏の麾下となってその一四世の孫の豊寿の代に、京都の添田氏某に医学を学んだという。初代豊寿は通称道策といい、宝永五年（一七〇八）に將軍家宣の子大五郎の侍医となつて、寄合医師に就任した。

四代就寿道周——これが玄春の祖父にあたる——は吉田長淑にオランダ医学を学び、長崎にも留学した蘭方医である。文政元年（一八一八）の医学館薬品会には、ウエイマンの『顕花植物図譜』を川原慶賀が模写した植物図を出品して、集まる人々の耳目をあつめたという。

玄春は文政九年（一八二六）生まれで、就寧と称した。嘉永元年（一八四八）に家督を相続し、医学館に勤務していた。安政五年（一八五八）のお玉ヶ池種痘所の開設にあたっては、その建設資金を拠出して、江戸市中之での牛痘接種の普及に協力している。文久三年（一八六三）に長崎に留学し、ご一新後の慶応四年（一八六八）には新政府から種痘館鑑定診察掛を命ぜられた。明治二年（一八六九）に四四歳で死亡した。菩提寺である浅草・了源寺に葬られた。

玄春の家族

玄春の実母、すなわち父玄成の最初の妻は溝口伊勢守直道の娘である。この実母は天保一三年（一八四二）に病没したので、その後妻にはいったのが、「添田玄春日記」に「母様」あるいは「御前様」と表記されている玄春の義母である。

玄春の妻は上総国夷隅郡原村の郷士江沢講修の五女奇勢子である。講修は国学や和歌にも通じており、教養豊かな人物である。この妻との間に一男三女があった。

玄春の屋敷は神田・和泉橋通りにあつて、藤堂屋敷の裏門の前である。面積およそ四〇〇坪で、周囲には垣根をめぐら

し樹木が豊富に茂っており、庭には野菜畑や豚小屋もあった。屋敷の構造や規模については不明だが、官医のかたわら自宅での診療や往診をおこなっていたので、「奥」「中奥」「表」という機能的な区分がみられる。

玄春の出仕先

はじめ医学館に出仕していた玄春ではあったが、安政五年前からは寄合医師として江戸城への出仕がおこななり、ついでお玉ヶ池種痘所へ勤務して、牛痘接種をおこなうようになった。文久三年には名称変更によって医学所へ出仕している様子が、「日記」にみえる。屋敷の周辺には伊東玄朴や大槻俊斎、手塚良斎がすんでいるので、これらの医師たちとの交流がこの日記に頻繁にあらわれている。

安政六年には小塚原において腑分けがおこなわれたことがしるされており、それが一〇月六日であることを明記している。文久三年の玄春の長崎留学にまつわる緒方洪庵や松本良順の動静が、この日記や洪庵の書簡と照合することによってさらに解明できるとおもわれる。長崎留学の状況については、仙台での総会において報告したところであるが、長崎での玄春の医学伝習はそのころの社会状況を勘案すると、さしたる成果をあげることなく帰府せざるをえなかったと考えられる。これが玄春のその後の公的生活において実力を発揮する機会をえなかつた原因であつたにちがいない。